

旅

坂田三允 (群馬県立精神医療センター看護部長)

角を曲がるとそこはもう旅……。永六輔のせりふだ。通いながれた道でも昨日とは違った町の表情に出会う。ついこの間まで賑やかに軍艦マーチを鳴らしていたパチンコ屋がシャッターを下ろし、長い間ありがとうございますなどとあまり上手とはいえない文字で書かれた日に焼けた紙が風に吹かれている。ふっと寂しくなる。何があったのだろう。この貼り紙をした人はどんな思いでこの文字を書いたのだろう……。今、どうしているのかな。引っ越したのだろうか……。

私はしばし空想の旅に出る。旅が好きだ。というよりも定住することになじめない。身動きがとれなくなってしまうのが苦しい。生活を営む必要性から、やむを得ず定住生活をしているけれど、心はいつもふわふわとまだ見ぬ土地へ漂っていく。私のなかにも漂泊の民の血が流れている、と思う。

そこで今回は、旅に関する書物を2冊。1冊目は沢木耕太郎の本。沢木耕太郎といえば、『テロルの決算』で大宅壮一ノンフィクション賞を受けた人、または火宅の人檀一雄を描いた『檀』の著者といったほうがわかりやすいだろうか。あるいは、ユーラシア大陸陸路の旅を綴った『深夜特急』の作者……。彼の旅は、たとえば近藤紘一の『サイゴンのいちばん長い日』の中の一節に惹かれて「マジスティック(ホテル)からの風景をどうしても見てみたかった」という目的に向かう旅。だが、マジスティック以外のことは何も決めていない。「行き当たりばったりに歩いていると、きつとどこか面白いところに

辿り着く」。さまざまな人と出会い、さまざまな表情のヴェトナムを知り、10日が過ぎて「私はサイゴンで、いやホーチミンで、まだその力(近藤紘一を再生させた力)を感じ得できるだけ時間を過ごしていない」「そのとき、私はまたこの土地を訪れるつもりであることに気がついた」というような感性の旅。

一方、都市銀行に勤務しつつ、休暇をとって、あるいは仕事を利用して出かける関岡英之の旅は、「著者あとがき」で述べられているように「二十数年前、高校生のときから、アジアや中近東など欧米とは違った伝統と価値観をもつ国々にこだわり続けてきた。それらの国の人々の知恵のなかに、私たち日本人が気づかなかったオルタナティブな道への手がかりが見つかるのではないかと、期待しながら旅を続けてきた」というような旅だ。日本人がほとんど訪れていないところ、政情不安定なところで、危ない目にもしばしば遭遇する。それでも彼は旅に出る。そしてたどりついたのは「私は、他者の内に知られざる何かを求めて彷徨う旅を続けてきた。だが自分が、自らの歴史から切断された不安な存在であることに、ついぞ思い至らなかった。私自身のために泣くことさえ、知らずに生きてきた。私はいまや、私自身の内なる旅を始めなければならない」ということであつた。

彷徨い、さすらう私の探し物は何だろう。初めはわかっていて、でも見つかったと思ったら、掌からこぼれていく。人生の探し物とはそんなものかもしれない。だから、芭蕉のように「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」のもよい、かな？▲



さかた・みよし

2か月に1度この連載を書くのに、四苦八苦しています。ピーンとくる本に出会うまで、結構時間がかかって……。でも、1度手にした本は、おもしろくてもおもしろくなくても最後まで読むという習慣が身についてしまいました。これはいいことなんじゃないかねえ？

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374